

2. ドラヴィダ言語学の立場から

児玉 望

1. はじめに

大野氏がこの15年あまりの間、『言語研究』（日本言語学会機関誌）や“International Journal of Dravidian Linguistics”を含め、さまざまな場で精力的に御説を公表して来られたのは周知の通りであるが、言語学者、わけてもドラヴィダ語の専門家に広く支持されているとはいえない状態が続いている。大野説に立った論文は、マドラス大学のコーダングラマン教授他、タミル語圏の数人の研究者によるものを除けばほとんど出ていないといってよい。一方で、大野説に対立する見解も、アルタイ語・オーストロネシア語混淆説を取る村山七郎氏の著を除いては、言語学の論文の形で現れていない。大野説そのものは、客観的な立場から、Zvelebil (1990) や Shibatani (1990) らによって、日本語・ドラヴィダ語の研究者に広く紹介されているのだから、この反応の鈍さについては、言語学の側からのなんらかの説明が必要であろう。

ドラヴィダ語学をこの15年の間、学んできた者として当惑せざるをえないのは、「比較言語学」についての問題意識のくい違いと、それによる議論のすれ違いである。大野氏の問題提起には、言語学の問題として取り上げることが、率直に言って躊躇される部分がある。一方、大野氏の説は、比較言語学に解決を委ねられるであろう言語学上の問題に、今のところ必ずしも答えていないように思われるのである。本節では主としてこの2点について、ドラヴィダ言語学の立場から論じてみたい。

2. 「言語史」という概念

大野氏の問題提起の中で、多くの言語学者が違和感をもつのは、言語と文化、というよりは言語史と文化史の関係についての取り扱いと、言語の同系の「立証」の言語学上の位置づけの点であろう。

大野氏は、「はじめに」の中で「もし日本語の系統を明らかにすることができれば、この日本文化の由来、この日本人の物の見方、考え方の基本的な成立の次第を知ることができるのではないかと述べている。つまり、日本の文化の歴史を明らかにする手段として、日本語と他の言語の系統関係を証明することが重要である、という認識の下に論が展開される。したがって、大野説においては、「タミル文化」と「日本文化」の相似性の解明は、タミル語と日本語の系統関係の比較言語学的論証と並行して、あるいは重なり合って、問題を解く重要な鍵である、という主張が貫かれている。

この方法は、言語学的な言語系統の論証としてはユニークであるといっていいいと思われる。言語史の解明に「文化」を持ち込むのはルール違反である、とする立場が比較言語学の枠組みでは支配的だからである。これは、言語学が言語以外の文化に対して無関心であるという

ことを意味しているわけではない。むしろ、19世紀前半に比較言語学が誕生して以来、その爆発的な展開の原動力となったのが大野氏と同様な問題意識だったであろうことは、言語学草創期に表れたさまざまな著作からも窺い知ることができる。にもかかわらずなぜ、文化的要素を排して言語を比較する、という方法論が確立されたのかは、比較言語学、というよりは言語学の成立の歴史と深く関わっている。

世界の言語を客観的な基準に従って分類する、という試みは、Ruhlen (1987) が指摘するとおり、18世紀以前から多くの研究者によって企てられてきた。これらは、「言語」を対象とする学問として、言語学の先駆と呼ぶことができるだろう。しかし、19世紀の言語学がそれ以前と大きく異なるのは、対象としての言語の捉え方の点である。よく知られているように、近代言語学の誕生の契機となったのは、インドからヨーロッパに至る広大な地域の諸言語が、共通の祖先をもっている、という知見である。人間やその集団の外部にあって、自律的に変化し続ける実体として、はじめて言語そのものが明確に対象化されたのである。もちろん現実には言語は人間の集団なしには存在しえないのであるが、言語の変化には、「音対応」を生み出した音変化のように、人間のコントロールの及ばない部分がある。他方、インドヨーロッパ語の場合には、語根と母音交替、あるいは語幹と屈折接辞の二分法といった、変化の及びにくい言語の骨格ともいうべき部分が確認された。なにが継承され、何が失われるかも、人間が選択に関与する余地のない部分であった。

このようにして、言語だけを対象とした比較を通して、言語の自律的な変化のあり方を探求する学問、比較言語学が誕生したのである。もちろん、言語も文化の一部として、集団が他の集団から意識的に取り入れる部分をもっている。しかし、それらは「借用」として比較言語学の対象としての言語からは注意深く取り除かれた。言語は、無意識のうちに継承され、変容する部分の中核にもつ、あるまとまりとして、容易に捉えられるようになった。この点で言語は文化の他の側面と大きく異なっている。文化の「中核」に何を置か、あるいは、ある集団が共有する文化のどんな側面が自律的に継承されるかは、にわかには明らかではない。にもかかわらず何かそのような部分、「民族精神」とでもいうべきものがあるはずだと信ずる人々は、比較言語学の成果に大いに注目することになった。

比較言語学が「文化語彙」を排除して言語の語彙を比較するのは、したがって、文化に対する無関心の故ではない。まず言語のみの比較を通して2つの集団が過去に存在した同一の言語を継承している可能性を調べる。ここまでが言語学者の任務である。もしも言語が継承されているのだとすれば、その2つの集団に共通に見いだされる文化が、同一のルーツに遡る可能性があることになろうが、その検証は、あくまで文化や歴史の専門家の領分である。大野説はこの部分にまで踏み込んでおり、通常言語学の議論に馴染まない部分を抱え込んでいる。また、「言語の中核」の外にある文化語彙までを言語の同系説に援用しているため、問題にしているのが文化の「(無意識的な) 継承」であるのか、それとも歴史時代の中国との関係に見られたような、文化の伝播であるのかが見えにくくなっている。

また、大野説は「文化の由来」に関する結論に至る必要上、日本語とタミル語の同系の「立証」を急ぐのであるが、この点でも比較言語学上の常識と齟齬をきたしている。

比較言語学には、2つの言語に親縁関係がない、ということを証明する手だてがない。言語の変容の聖域、つまり永遠不変の部分や、変化の方向のモデルコースはいまだに発見されていないから、一旦分裂して違う道を歩み始めた2つの言語は、遅かれ早かれ過去の親縁関係の痕跡が跡形もなく消え去った状態に到達するはずだと考えなければならない。従って、2つの言語の同系は、証明したり反証したりできる性質のものではないのである。

にもかかわらず、言語の同系をわざわざ問題にするのは、近い過去における言語の変化の過程の解明という極めて言語学的な作業の出発点とするためである。アルタイ語説の提唱者のひとりである Miller が辛辣に述べているように、言語資料の各データがなぜそのような形と意味をもっているのかを言語史上の変化の結果としてうまく説明できない限り、言語の同系説には言語学的な価値がない。2言語のある部分の対応をあげていくという作業は、単に言語の同系の証拠の提示に止まらず、両者の歴史的関係、つまり、一方から他方へ、あるいは共通の祖形から、それぞれ何らかの変化が起こったと主張していることにほかならないのである。

大野説の論証では、変化の過程に関する説明が不明確であるように思われる。特に、比較の対象としてドラヴィダ語族全体ではなくタミル語だけを選択することが「適切」である(『日本語の起源 新版』p.33)、とする部分では、この点に関する配慮を全く欠いているといつてよい。タミル語の他のドラヴィダ語との親縁関係は長く受け入れられてきた仮説であり、それに基づいてタミル語や他のドラヴィダ語の経てきたであろう変化の過程はある程度まで説明がなされている。したがって、ドラヴィダ語族全体を対象としない、という比較は、ドラヴィダ語学の側から見れば、日本語との関係だけからタミル語の言語変化を再構成しよう、という、一方的な試みであるといわざるをえないのである。

本稿の後半では、大野説を採用した場合、ドラヴィダ語学の側で、どんな未解決の問題が生じることになるかを中心として見ていきたいと思う。

3. 大野説から見たドラヴィダ語史

3.1. 音変化

音変化について、『日本語の起源 新版』では第4章において、基層言語説を採用することによって、タミル語で区別されていたたくさん音が日本語では区別がなくなってしまったという点に対する説明としている。つまり、(第二言語としての話者を多く抱えた)日本語の側で変化が起こったことになるから、ドラヴィダ語にとっての問題は少ない。しかし、以下の3点ではタミル語側での音変化を想定しなければならない。

巻末付表の p.7 以下において、タミル語の語頭で *c > ゼロの変化が生じたという Burrow の説が紹介され、これを根拠として日本語の語頭子音 s とゼロの双方がタミル語の語頭子音 c とゼロのどちらかに対応する、として語の対応がまとめられている。しかし、この取り扱いは、タミル語の語頭ゼロには *c に由来しないものがあることを度外視している。たとえば表6において、DEDR の番号665番までの13項目は、対応する他のドラヴィダ語に c が対応するものがないため、本来語頭子音がゼロであったと推定されてきた語群である。大

野説では、日本語でsに始まる語と対応することを根拠として、これらの語が本来ドラヴィダ語でも語頭に *c⁽¹⁾があったと仮定していることになる。

一方、日本語の語頭のハ行子音とワ行子音は、ともにタミル語の p と v に対応しているとされる。このような場合、ほかに説明がつかない限り、祖形として4つの子音を仮構し、日本語とドラヴィダ語でそれぞれことなる組み合わせで2つずつが合流した、と説明することになろう。タミル語以外のドラヴィダ語で日本語のハ行子音とワ行子音でそれぞれはじまる語群に対応する音対応が発見されれば、この仮説は裏付けられたことになる。しかし、今のところ、日本語との対応をのぞけば4子音説を採用する根拠がない。4子音説をとらないとすれば、日本語かドラヴィダ語かのいずれかで本来2つだった音が何らかの条件で他方で4つに分裂し、さらに合流した、という筋書きを想定することになる。

母音としては、唇音の後以外の位置では日本語に4母音が想定されているが、このうち u と ö はともにタミル語の u, u: に対応するとされる。タミル語側で変化が生じてこれらの区別がなくなったのだとすれば、ドラヴィダ祖語は5母音ではなく6母音体系をもっていたと仮定しなければならない。日本語の側でタミル語 u, u: が2つの音に分化したのだとすれば、その条件の説明が必要になるだろう。

3.2. 文法の変化

文法の対応が言語の同系を論ずる場合に重要であるのは、p. 44 において大野氏が指摘している通りである。文法は、言語の中でもっとも変化しにくい部分であると考えられるからである。ただし、インドヨーロッパ語比較言語学で重視されたのは、文法の中でも主として語構成に関する形態的特徴であった。この点、日本語とドラヴィダ語は、ともに「膠着語」と分類され、問題がないように思われる。大野氏がタミル語を論ずる際に、「助詞」「助動詞」といった、日本語文法固有の用語を適用しているのもこの点を考慮してのことであろう。

しかし、同じく膠着語と分類されてはいても、日本語とドラヴィダ語では語構成が異なるため、やはりこのような単純化には無理が感じられる。たとえば日本語の格助詞は、不変化の体言に後続する不変化の付属語、として、位置の点を除けば英語の前置詞にも似た独立性をもっているが、ドラヴィダ語の格接尾辞は、名詞語幹に付加された形でしか現れない明らかな束縛形式である。それ自身が、接続する語に応じて形を変える場合もあるし、一方、後続する格接辞によって名詞の語幹が形を変えることもありうる。ドラヴィダ語で共通して指摘されているのは、名詞や代名詞が主格と後置格の2つの語幹をもち、後置格は、格接辞を伴わない場合にしばしば属格の機能をもつ、という点である。タミル語でも主格に接辞 -m, 後置格に接辞 -tt- をとる語幹の現れる語をはじめ、名詞に主格・後置格がどんな接辞を取るかに応じた活用による分類がある。このことは、日本語とドラヴィダ語の同系説に立った場合、日本語の単純な名詞形態が古く、ドラヴィダ語側で融合が生じたのか、あるいは逆に、古い複雑な形態組織が音変化を通して磨耗した結果、あるいは基層言語の影響で、日本語が新たに分析的な名詞格体系を獲得したのか、という疑問を呼ぶ。

いずれの説を採るにしても、日本語の格助詞と、ドラヴィダ語にさまざまな形で見いだされる格接辞の語形の一つとの音形の対応を比べることにどれほどの意味があるかには疑問の

余地があるだろう。

一方、日本語でも（人称変化を除けば）ドラヴィダ語に似た活用組織をもつ動詞については、過去時制接辞 *-nt/-tt* の選択を、日本語の助動詞「ぬ」「つ」の選択と結びつけ、両言語における文法的な特徴の保持のケースとして、共通祖語段階における変化の過程にまで踏み込んだ詳しい紹介がなされている。大野説は、動詞「いぬ」「うつ」との複合動詞の文法化（活用化）を、日本語とタミル語に並行的な文法変化と説明する。*-nt/-tt/-t* に *-i* を加えた過去時制接辞の異形態の存在は、南部ドラヴィダ語派の特徴とされているから、もしこれが南部語派におけるイノベーションであったとすれば、日本語の分化の時期を特定できる重大な証拠となろうが、筆者はこの説を採らない。タミル語で *-nt/-tt* が接続するのは、動詞語根が特定の音に終わる場合に限られている。このことは、南部ドラヴィダ語における時制接辞の交替現象が本来は語幹部の形態の違いであったことを示唆している。おそらくは、広くドラヴィダ語全般に見られる自動詞・他動詞形成の派生接辞が、本来は単一であった時制接辞と一定の条件下で融合することによって南部ドラヴィダ語型の活用型が形成された⁽²⁾とみるのが穏当であろう。

自動詞と他動詞に接尾辞による形態論上の交替が見られることは、日本語とドラヴィダ語に共通の特徴である。ただ、日本語においては自動詞や他動詞がもっぱら接辞付加によって派生するのに対し、ドラヴィダ語では子音交替 (*-NP/-PP*) によるものが広く見られる。また、日本語では自動詞・他動詞双方を派生する接辞として *-e* が存在するが、ドラヴィダ語との同系説はこれを説明しない。つまり、日本語とドラヴィダ語の自動詞と他動詞の派生には重なりはあるが対応しているとはいえ、一方が他方を説明するという関係にはない。

3.3. 構文の対応

大野氏の「助詞」は、日本語文法での係助詞や終助詞を含んでいる。これらは、ドラヴィダ語文法で小辞 (particle)、一般言語学上は後倚 ([en]clitic) としてしばしば取り扱われ、特定の語形の一部を構成するのではなくさまざまな句に後続するが、自立性のない、「語」に対応する。これらは音韻論上は語としての資格を持たないが、その配列について形態論ではなく構文論で取り扱わなければならない要素として、近年言語理論上の関心を集めている形態素である。

大野氏は、日本語とタミル語とで対応が見られる音形と用法を紹介し、同系説の重要な証拠として提示している。p. 57 にあげられた音形については必ずしもドラヴィダ語に広く対応が見られるとはいえ、ものによっては他の言語のどんな小辞に対応するかが明らかでないものもあるのでここでは取り扱わない。

p. 45 以下で取り上げられている *um* は、タミル語文法上は、未来形 3 人称定形および（人称不定の）関係分詞形と、小辞の、同音異義の形態素として取り扱われるが、大野氏はこれらが同一の形態素とした上で、日本語の側で *mu* と *mo* の 2 つに分化したとする説を採用する。タミル語以外のドラヴィダ語ではこれらは必ずしも同音であるとはいえ、大野説を採用すると、日本語に生じたのと同じ分化が同時多発的に他のドラヴィダ語でも進行した、という確率の低いシナリオに従わざるをえないことになるだろう。

これに対し、小辞としての um の用法の助詞「も」のそれとの対応は、真剣な検討に値するように思われる。実は、um については、サンスクリット api との（インド以外のインドヨーロッパ語には見られない）用法の対応が、インドの言語圏（Sprachbund 地理的に隣接する諸言語が語族にかかわらず共有する特徴）⁽³⁾現象の一例として取り上げられた著名な論文が、Emeneau によって著されている。（Emeneau 1956）全部で5つあげられているこれらの用法は、

1. 「もまた」
2. 等位接続（「…も…も」）
3. 数量詞に後続して「すべて」
4. 譲歩節を構成（「…しても」）
5. 疑問詞句に後続して不定代名詞句を構成

と訳することができるだろう。

これらのうち、3を除くすべてが日本語の「も」に対応するように思われる。3にしても、「数量詞+とも」の用法と似ているし、意味こそ違え、「数量詞+も」の用法は日本語にも存在している。ただ、これはサンスクリットとの対応についてもいえることであるが、細かい点では食い違いもみられる。たとえば、2の等位接続は、接続するのが名詞に限らない点では「も」に似ているが、ドラヴィダ語の um に対応する語形は（一組の結婚について言及する）「AとBが結婚した」や「AとBの間」のような、「も」のカバーしない用法をも持っている。また、数詞1に後続する「も」が否定文に現れて全部否定を表現できるかどうかについては、ドラヴィダ語の間でも違いがある。

Emeneau の観察は、これらの小辞の用法が、比較的容易に借用されうることを示唆している。だとすれば、用法の対応は日本語とタミル語の同系の強力な証拠とはなりえず、少なくとも何らかのルートで日本語の祖語とドラヴィダ語との間で借用があった可能性をも否定しないことになる。もうひとつ可能なのは、借用や祖語からの継承の有無に拘わらず、ある類型に属する言語が普遍的にこれらの用法を共有する何らかの理由がある、という解釈である。Emeneau 自身、用法1から5の間の意味的な連関を指摘している。

また、非常に消極的な理由付けとして、1から5の用法は、ほぼ相互に排他的な環境に出現し、用法間の対立（つまり同音異義）が生ずる可能性が低い、ということもあげられるだろう。もっとも多くの統語的環境に出現できる用法1にしても、たとえば「誰も来ましたか？」や「（みかんでなく）りんごを2個も食べました。」という文脈で用いられることは稀であると思われる。どんな経緯で5つの用法が1つの同音の形態でカバーされるようになったかはともかくとして、ひとたび用法が確立されてしまえば比較的安定して用いられ続けるであろうことは十分に予想される。

つまり、構文の対応が言語の同系説を支持する証拠として十分な説得力をもつためには、その構文が他には見いだされない特異なものであり、意識的に借用されることが難しく、その構文が生ずる合理的な理由付けがむずかしいという条件がつくことになるといっていだろう。この観点から興味深いのは、大野氏のあげる「係り結びの法則」の対応である。

係り結びの法則は、一般言語学の用語に翻訳すれば、動詞文の中で動詞のとり語形に複数の系列があり、一方の系列の動詞が出現する際に、動詞文の動詞（用言）以外の位置が小辞により必ずマークされている現象、といいかえることができるだろう。ドラヴィダ語の場合、この動詞形は動詞の名詞的語形となる場合がほとんどで、統語的に名詞と同じ位置（「案ずるより生むが易し」）を占めることができた文語日本語の連体形にほぼ相当するといつてよいと思われる。

注意が必要なのは、ドラヴィダ語の場合、疑問詞を含む動詞文の場合、小辞なしで動詞が名詞的語形を取りうる点である。日本語とドラヴィダ語の間には、日本語が疑問文の種類を問わず出現しうる疑問終助詞をもつものに対し、ドラヴィダ語では疑問詞疑問文では文末（正確には動詞後続の）疑問小辞を取らない、という違いがある。「係助詞なき係り結び」の現象は、これと並行的に見える。

「係り結びの法則」が一般言語学的にいつて特異な現象かどうかについては、他ならぬ日本語の歴史の中に解答のヒントが与えられているように思われる。日本語では連体形が終止形に置き換わってしまったため、動詞の2系列の区別がなくなり、係り結びの法則はなくなってしまった。しかし、係助詞こそ復活しなかったものの、文語連体形の名詞的用法をカバーすることになった「…の」の登場で、動詞文の動詞に2系列（「どこにいきますか」と「どこにいくのですか」）が存在する、という状態は依然継続している。もちろん、この形が文語日本語の連体形係り結びとまったく同じ機能をもっているということとはできないが、少なくとも2系列の動詞述語形がそれぞれ異なる機能を果たしていることは疑いない。だからこそ形態の磨滅によって係り結びの法則が消滅したあと、失われた機能を回復するために新たな2系列の対立が生じたのだとみることができる。つまり、日本語の観点からは「係り結び」は特異な現象ではないし、おそらくドラヴィダ語にとってもそうではない。

係り結びの法則、あるいは、文末における動詞の2系列の対立が、ある形態論上ならびに統語論上の条件を満たせば出現しやすくなるというような普遍的な現象であるかどうかは、日本語やドラヴィダ語以外の言語との比較を待たなければ結論は出せない。また、逆に特異な現象として両言語の同系の証拠とするためには、単に係り結びがあるかどうかには止まらず、さらにその用法の細部までを比較して、共時的には合理的な説明を与えるのがむずかしい対応を見いだす必要があるだろう。大野氏はサンガムの「助詞・助動詞」の研究が日本語の古典語のそれと比べてはるかに遅れていることを指摘している（p. 50）が、サンガムに限らず、ドラヴィダ語全般に関して、これらの小辞や関連する現象についての解明にまだ不十分な点が多いことは認めざるをえない。いずれの立場をとるにしても、大野説のような日本語の視点からの問いかけは、今後の研究の進展に寄与するものと期待される。

4. 日本語系統論のために

以上、ドラヴィダ語学の立場から、学際的な立場をとる大野理論のうちの言語学に関する部分を、ドラヴィダ比較言語学の立場から検討してみた。大野氏の問題提起に対し、これまであまり反応がなかったのは、一言でいえば、大野氏の仮説を採用することによって生じてくる

問題に比べて、解決されるであろう問題がドラヴィダ語学の側ではあまりにも少なかったからである。大野説は、すでに2世紀近いドラヴィダ語・ドラヴィダ語史研究の蓄積を十分に消化し、検討することなく、一方的に展開されたもの、という観が強いのである。

最後に、ドラヴィダ語研究の立場を離れ、最近の言語史研究の動向に鑑みて、今後の日本語系統研究に何が望まれるかを論じてみたい。

今世紀に入って言語学は、言語に関するさまざまな現象の比較、という基本的な方法を維持しながら、その対象を言語史以外に大きく拡大してきたのであるが、言語の系統の解明も、依然として重要な課題であり続けている。強調しておかなければならないのは、系統が未解明であるのは日本語だけではない、という単純な事実である。英語やペルシャ語は「インドヨーロッパ語族」という系統分類に属するが、この語族の祖形である「インドヨーロッパ祖語」自体は、この語族以外の他の言語とどんな関係にあるかが明らかではない。突き詰めていけば世界中のどんな言語であれその歴史を遡れば日本語同様に「孤立」していて、比較言語学的手法に拠っては言語変化を再構できない段階に辿り着くのである。この、「言語史の上限」をさらに上げていくための試みは「インドヨーロッパ語」を含め、多くの言語について現在でも続けられている。このためには19世紀に確立された伝統的な方法を超えた、言語の変化に関する新たな理論に基づいた方法を確立する必要があるのであるが、学会全体から支持されるような理論は未だに現れていない。おそらく、日本語の系統が解明されるとすれば、日本語だけでなく他の言語の系統の解明にも有効な方法に基づいたものでなければならぬだろう。

大野説では、文化的要素の取り込みの他、「基層言語説」、つまり2言語併用状態に帰せられる急激な言語変化の仮定が、伝統的比較言語学の方法から逸脱した部分となっている。基層言語（あるいはノルマン人の征服後の英語に対するフランス語のような上層言語）の仮説自体は取り立てて新しいものではないのであるが、伝統的な比較言語学では、基層言語による説明はなるべく避けるのが普通である。これは、一つには、規範的な方法で説明できない部分の安易な解決として用いないようにする、という意味もあるが、より根元的には、「基層言語の言語変化への干渉」は、比較言語学がその拠り所としている言語変化のモデル（樹形説）の、言語は枝分かれするだけで混淆しない、という前提と相容れないからである。

このような19世紀的な言語変化の考え方は現実を必ずしも反映しないのではないかと、という反省から、さまざまなパターンの言語接触が実際にどのような言語変化を引き起こすのかを正面から取り上げた研究が現れはじめている（Thomason and Kaufman 参照）。実は、インドという地域自体、有史以来、現在に至るまで、多言語併用という形での異なる言語の共存が続いてきた地域の一つであり、言語接触とその結果として生じる言語変化の研究に豊富な材料を提供しているのである。

今後、「基層言語説」を採用して日本語の系統変化を説明する際には、その言語がどのような言語であり、どんな形で系統変化に関わってきたかのより突っ込んだ論証が不可欠になると考えられる。

複数の言語を比較し何が共通で何が共通でないかを見いだす、という手続きは、言語学で

広く用いられている方法である。19世紀以来の歴史言語学では、共通な部分を、同一起源であれ接触による借用であれ、なんらかの史的事実の帰結として説明しようとしてきた。これに対して、歴史言語学を経て生まれた20世紀の構造主義言語学では、史的事実の帰結として説明できない共通点や、史的变化そのものを、人間の言語能力、あるいは認知の仕組みから普遍的に説明しようとする。この2つのアプローチは、日本語とドラヴィダ語の係り結びの場合のように、同じ観察からときに相反する結論を導くこともある。しかし、特殊と普遍が表裏一体の関係にある以上、特殊性の発見に依存する歴史言語学も、普遍性への顧慮なしに結論を出すことができないのは自明であろう。

20世紀の日本の比較言語学最大の成果は、日本語方言のアクセントの構造主義的な分析の上立った、アクセント史の解明であろうと思われる。一見千差万別に見られるアクセントであるが、構造主義的な分析が、各方言の音韻構造の一部として共通の枠組みで分析することを可能にした。その結果、どの語が同じアクセントのパターンに属するか、という極めて特殊な、普遍性の期待されない特徴の点で、日本語諸方言は驚くべき共通性をもつことが明らかになった。つまり、アクセントの型がどのように実現されるかは、さまざまな変化を経て方言ごとに異なっているが、アクセント型による語の分類そのものは、各方言への分化以前の日本語の祖語の段階ですでに存在していた言語事実であることが明らかになったのである。不思議なことに、大野説ではこのアクセントに関する言及がまったくなされておらず、したがってドラヴィダ諸語のようにアクセントによって語が区別されない言語との比較から日本語のアクセントの起源を推論する手がかりはない。

アクセントによる語の区別が偶然に生じ定着する、ということは考えにくい。日本語系統論の正否をはかる上で、日本語のアクセントの発生をどう説明するかが今後とも重要な尺度となるものと考えられる。

注

- (1) 語頭 *c の脱落は、タミル語だけでなくドラヴィダ諸語の多くで散発的に見られ、その説明がドラヴィダ語史研究の大きな論点となっている（最近の動向については Krishnamurti 1978, Emeneau 1988 参照）。しかし、北部ドラヴィダ語派ではこの脱落が起きなかったということは定説となっている。大野説の13項目は、この語派においても *c の脱落が起こっており、なおかつ日本語だけはこの変化を経なかったと主張していることになる。この主張は、変化の年代について深刻な矛盾を引き起こすことになる。タミル語の語頭 c は、*c に由来するものだけでなく、反り舌子音が後続しない位置での ki-, ke- の口蓋化、という南部語派の中でのタミル語のイノベーションによって生じたものを含むが、大野説では、これらも対応例として挙げられている。これらの語では c の脱落が観察されないことから、c の脱落は口蓋化に先行していたとみなされるのであるが、口蓋化までの変化を日本語とタミル語が共通に経てきたのだとすれば、タミル語で c が脱落した語ではすべて日本語でも脱落が起こっていなければならないことになる。

- (2) Krishnamurti (1994) は、南部ドラヴィダ語派での過去時制接辞の nt/tt の起源について新説を展開している。
- (3) インド言語圏現象の証拠とされる、他の文法的特徴について、Masica (1976) が、近隣諸言語も含めた検証を行っているが、その結果、これらの特徴の多くが日本語を含め、ユーラシア大陸北部やエチオピア諸言語にも共有されていることが観察された。この解釈には、同系説を含め、さまざまな可能性があるが、これらの文法的特徴をより厳密に定義して改めて比較する必要をも示唆している。

参考文献

- Burrow, T. 1947. "Dravidian Studies. VI: The loss of initial c/s in South Dravidian." *BSOAS* 11. 122-39.
- Emeneau, Murray B. 1956. "India as a linguistic area". *Language* 32. 1-21.
- Emeneau, Murray B. 1988. "Proto-Dravidian *c- and its developments". *JAOS* 108. 239-68.
- Krishnamurti, Bhadriraju. 1961. *Telugu Verbal Bases*. University of California Press.
- Krishnamurti, Bhadriraju. 1978. "Areal and lexical diffusion of sound change: Evidence from Dravidian". *Language*. 54. 1-20.
- Krishnamurti, Bhadriraju. 1994. "Introduction" *Dravidian Studies: Selected Papers by M. B. Emeneau*. Delhi.
- Masica, Colin P. 1976. *Defining a Linguistic Area*. Chicago University Press.
- Miller, R. A. (1971) *Japanese and the Other Altaic Languages*, Chicago University Press. [西田龍雄監訳 (1981) 『日本語とアルタイ諸語』東京：大修館書店]
- Ruhlen, Merritt. 1987. *A Guide to the World's Languages vol. 1. Classification*. Stanford University Press.
- Shibatani, Masayoshi. 1990. *The Languages of Japan*. Cambridge.
- Thomason, Sarah G. and Terrence Kaufman. 1988. *Language Contact, Creolization and Genetic Linguistics*. University of California Press.
- Zvelebil, Kamil V. 1990. *Dravidian Linguistics: An Introduction*. Pondicherry.